

「内視鏡所見のよみ方と鑑別診断 下部消化管」

多田 正大・大川 清孝 編
三戸岡英樹・清水 誠治

癌研究会附属病院院長

武 藤 徹一郎

大腸疾患に関する内視鏡の成書はすでに数多く出版されており、それぞれに個性と特色に充ちた名著が多い。しかし、本書は其中でも飛び切りの個性と内容に富んだ、名著中の名著と言って過言ではない。それは28年間、140回に及ぶ大阪の「大腸疾患研究会」の例会を通して、選りぬかれた症例の経験が本書に集約されているからに他ならない。まだ大腸疾患に注意が払われていなかった1973年に、この研究会を立ち上げて以来、弛むことなく症例の検討と集積を継続してこられた、執筆者代表の多田正大博士をはじめとする同志の方々の努力と炯眼に心より敬意を表したい。

本書は4章から構成されているが、第3章の「腫瘍性疾患の内視鏡所見のよみ方と鑑別診断」、第4章の「炎症性疾患の内視鏡所見のよみ方と鑑別診断」の2章が全体の90%を占めている。各章の前半10%はそれぞれ内視鏡診断に必要な腫瘍性疾患と炎症性疾患に関する基礎的事項が要約されているが、これが実に簡潔にして必要十分な情報を含んでいて、他に類を見ないほどである。偽茎(pseudopodicle)を有茎として提示されている報告例が決して少なくない中で、本書ではきちんとその鑑別の要点が記されており感心させられた。しかし、本書の圧巻は何と言っても鑑別診断に提示されている症例の量と質の凄さであろう。見開き2頁の左側に基本スタイルとして

4症例、各症例2枚のカラー写真が呈示されている。

腫瘍性疾患の章では、「分葉がある病変」とか「陥凹を主体とする病変」のごとく、マクロ的な形態的特徴のあるものばかりが選ばれており、その中に必ず1例の癌が含まれている。2枚の写真ではしっかりと違う情報が提供されており、その横に必要なして十分な臨床データならびに内視鏡所見が簡条書きにまとめられている。右頁には各症例の確定診断、必要に応じて組織像、拡大観察像、エコー像などが提示され、病変に関する解説、鑑別診断のポイントまでが、簡条書きで簡潔にまとめられている。少なく見積もっても150症例300枚の見事なカラー写真が掲載されており、読者は一頁一頁の4症例を比較することによって、早期癌との鑑別診断を学ぶことができるようになっていく。

炎症性疾患についても腫瘍性疾患と構成は同様であり、「発赤」「アフタ様病変」「縦走潰瘍」などの所見別に、様々な炎症性疾患の内視鏡所見が提示されている。アフタ様病変や縦走潰瘍が多彩な形態を呈するばかりでなく、様々な疾患が同名の所見を呈するという事実をこれほど見事に成書に顕した本は例をみない。病原性大腸菌O157腸炎、クラミジア直腸炎などの珍しい例も提示されており、150症例300枚以上のカラー写真を一頁一頁、各症例ごとに鑑別診断を考えてゆけば、自然に炎

症性腸疾患の知識を増すことが可能である。百聞は一見に如かず、ぜひ手にとって写真を眺めることを勧めたい。

このようにマクロ的な内視鏡所見に基づいた症例の鑑別診断は、まさに内視鏡医が日々直面していることである。症例提示による具体的な鑑別診断書が多田博士らによってここに完成されたことは喜びにたえず、どれだけ多くの医師ならびに患者さんが恩恵を受けるか計り知れないであろう。

著者が内視鏡検査も診断のための1つの手段であり、X線との協調がなければ確定診断までに無駄な回り道を辿ると述べているのはまことに正論である。「本書を通して大腸診断学の精神を看破して欲しい」という著者のメッセージに内視鏡への熱い情熱を感じるのは筆者だけではあるまい。本書を通覧して「感動した!」というのが筆者の第一印象であった。本書は経験者と未経験者とを問わず、すべての内視鏡医に推薦したい名著である。最後に、これだけの内容のものはぜひとも英文出版され、貴重な、また臨床的に有用な経験を世界に発信されることを期待したい。

●B5 頁208 図9 写真51
カラー写真716 色図6 表24
2002 定価(本体12,000円+税)
送料実費

医学書院 刊(☎03-3817-5657)